53

新出の写本「遁花秘訣」（山岸本）について
――白鳥雄蔵，板垣利斎，そして津軽との接点――

松木　明知
弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

南部下北出身の中川五郎次は1807年にシベリアに拉致され，足掛け6年間の滞在後，1812年に帰国を許されわが国に送還されたが，彼は帰国に際しシベリアに導入されて間もない牛痘種痘法の技術を習得し，牛痘種痘法に関するロシア語の書籍2冊を将来した．書籍の中の一冊は偶然にも松前に幽囚されていたロシア船長ゴローニン取調べのため同地に派遣された幕府訳官馬場貞由の目に留まり，馬場はこれを翻訳して「遁花秘訣」と題した．残念ながら「遁花秘訣」は刊行されずに写本として伝えられたが，写本の一つは三河の利光仙庵によって「魯西亞牛痘全書」と改題出版された．現在のところこの「魯西亞牛痘全書」以外に16種の写本が知られている．

最近福井県鯖江市の山岸利明先生が「遁花秘訣」の一写本を所蔵されていることを知り，先生の格別のご好意で実見することが出来た．目次の順序，内容，ロシア語原書のカタカナ表記などによって，この写本は狩野本Ｂの系統に属することが判明した．写本末尾に記されている識語に津軽地方で最初に種痘法を行った秋田の医者板垣利斎に関しての重要な記述があるので，それを紹介し考察を加えたい．識語を読み下し文にして下に記す．

> 此書，原松前蝦夷の通辞五郎次，之を魯西亜に得て，而して馬場貞由の訳定を俟（ま）つ．以って之を白鳥雄蔵に授け，雄蔵之を板垣梨斎に傳える．予，則之を梨斎に得る．原書，梨斎忽卒之間に写し，未だ一, 二の誤謬を免れず．校正せずを得ず．嘉永辛亥初秋念．俟命楼主人撰

識語の筆跡は写本の冒頭「題書」の下の書き入れ「陸奥津軽草医長三浦平興君隆甫写」の筆跡と似ているので「俟命楼主人」は津軽の医者三浦隆甫と考えられる．この文章は甚だ重要である．「此書，原松前蝦夷の通辞五郎次，之を魯西亜に得て」とあるのは正しい．「五郎治」も「五郎次」となっており正しい．彼が原書をロシアから将来したことも間違いない．次に「以って之を白鳥雄蔵に授け」とあるから馬場貞由が直接白鳥雄蔵に「遁花秘訣」の写本を与えたように解釈されるが，年齢的に馬場佐十郎と白鳥雄蔵の間に直接的接触があったとは考えられない．白鳥が関心を持って一写本を入手したことを指すのであろう．さらに「雄蔵之を板垣梨斎に傳える.」とある．「梨」は「利」と同音であり，「梨斎」は「利斎」と見て差し支えない．雄蔵が利斎に「傳える」とあるが，「傳える」の内容は雄蔵の所有する「遁花秘訣」の写本を利斎に与えたと言う意味ではなくて，それを書写させた意であることは「原書，梨斎忽卒之間に写し」とあることによって理解されるであろう．このことによって雄蔵と利斎の間に直接的な接触があったと見なければならない．もし直接的な交渉があったとすれば，書写に加えて種痘法に関しての何か口伝的なことも利斎に伝授されたことも十分に考えられる．利斎が急いで書写したことは「忽卒之間」という言葉によって窺われるが，写本中に内容的に抄出的部分が散見され「忽卒之間」に筆写されたことを示唆する．津軽の医師三浦隆甫は利斎から写本を借覧して書写した．「予，則之を梨斎に得る.」とあるが，秋田の医者利斎は前述したように1854年4月に津軽の木造に来て種痘を行っている．そうすれば利斎と三浦とが津軽において直接に交流を持ったことは高い可能性をもって言うことが出来る．この写本は北方系種痘法の歴史，とくに秋田地方，津軽地方における種痘法の情報伝達についてこれまで不明であった板垣利斎と津軽との関連を解く重要な知見を提供するものと考えられる．